

事務所：(160) 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内

電話=(03) 364-2311 振替=東京1-6599

原稿宛先：(113) 東京都文京区弥生1-1-1

東京大学農学部森林動物学教室 樋口広芳

◎国際鳥学会第1回告知◎

第18回国際鳥学会は、1982年8月16日から25日までモスクワ国立大学で行われることになりました。学会出席者は、鳥の研究に関する最新の科学とその応用のすべての面における広範囲な問題について討論することになります。全体及びシンポジウムで発表される研究報告のほかに、ポスター発表や鳥学会に関する映画、芸術家や写真家による作品の展示も行われる予定です。さらに学術、文化、歴史に関する調査旅行が、学会後或いは学会前にバイカル湖、中央アジア、コーカサス等を含むソビエト連邦の広い領域にわたって行われることになっています。

本学会のソビエト組織委員会の委員長はアカデミー会員ウラジミール・ソコロフ氏です。委員会への連絡は次の場所に願います。

Prof. Valery Ilyichev,
Secretary-General of the XV111th
International Ornithological Congress,
Ringing Centre, Fersman Street 13, Moscow 117312, USSR
電話1246000 電報 Moscow r-312 FALCO

第18回国際鳥学会に参加されたい方は、上記へ正確な連絡住所をお知らせ下さい。その住所はこの学会に関するすべての連絡に使用されることになります。1980年内にシンポジウムのリストや座長の氏名、旅行日程、参加費等について第2回目の通知をお送りします。

(IOC委員 中村 司)

11月例会

とき：11月29日(土)午後2～5時。会場：東京大学農学部2号館2階第1講義室
(文京区弥生1-1、地下鉄千代田線根津駅下車徒歩7分、または国電お茶の水駅から池袋東口行き都営バスで東大農学部前下車。電話：東京(03)812-2111)。参加費：200円。

1. 西ドイツの鳥と鳥学の現状(山梨大 中村 司氏)
2. 中国東北地方の鳥を訪ねて(東京大 樋口広芳氏)

昨年の第17回国際鳥学会出席をかねて、西ドイツで2か月の研究をされてきた中村氏と、今夏、中国の東北部を2週間旅行された樋口氏に、多くのスライドを混じえてお話ししていただきます。マジメな話とはもとより、海外へ出かけるお金と時間とコネのつくり方、現地でいかに女性にもてたか(もてなかったか)など、くだけたお話も期待しましょう。

◎ 求む鳥の声、イギリスから◎

ヨーロッパ産の鳥全種の声を取録しようというレコード集があるが、その最新版をカセットテープで作る計画が進んでおり、このほど编者から、未入手の鳥声収集に協力するよう要請する手紙が、本学会に届いた。

これは、The Peterson Field Guide to the Birds Song of Britain and Europe という、ヨーロッパ産の鳥の鳴き声 (song のみならず call も) を集めたレコード集で、30cm LP 14枚と38頁の解説書 (英文) からなる。名称の示すように、R.T. Peterson ほかの著した A Field Guide to the Birds of Britain and Europe (Collins 社, London) と合わせて利用できるよう、同書と同じ配列順で鳥の声を取録してある。スウェーデンの Sveriges Radio 録音のものが多いが、アジアからの迷鳥の声は NHK の中坪礼治氏録音のものを使うなど、広い範囲から集めている (ただし、未収録のものも、いくつか残っている)。ステレオだが、ほとんどはモノラル録音から作った“擬似ステレオ”である。编者は、S. Palmer と J. Boswall。

本の方は、初版が1954年発行、第2版は1965年、第3版が1974年にそれぞれ刊行されており、レコード集は1969年から逐次刊行されて74年頃完結し (14枚組)、この手紙によれば、本の第3版に準拠した LP 15枚組の増補版が出ているようだ。洋書販売店を通じて購入できる。(SR × Records RFLP 5001-5014, Sveriges × Radio, × Publishing × Department, S10 × 510 Stockholm. ただしこのデータは初版14枚組のものである)

编者の求めている鳥の声は、①下に記した 種の声 (song と call) ②既に収録された鳥でも、野外識別に役立つ call、とくにスズメ目とシギ・チドリのものである。提供できる録音をお持ちの方は、直接、编者に連絡されたい。

Jeffery Boswall, Birdswell, Wraxall,
Bristol BS19 1JZ, England.

1. 本の第3版の本文に未収録の鳥 — チャムネミフウズラ *Turnix sylvatica*, フサエリシヨウノガン *Chlamydotis undulata*, オオメダイチドリ, シロハラチュウシヤクシギ, ハジロコウテンシ *Melanocorypha leucoptera*, クロコウテンシ *M. yeltoniensis*, ルリガラ *Parus cyanus*.

2. 本の第3版の迷鳥の部に未収録 — ズグロシロハラミズナギドリ *Pterodroma hasitata*, アフリカクロサギ *Egretta gularis*, メガネケワタガモ, ギンケイ, オオチドリ, エスキモーコシヤクシギ *Numenius borealis*, ベンガルアジサシ *Sterna bengalensis*, オナガカエデチヨウ *Estrilda astrild*, オオマシコ。

3. 本の第3版発行後に新たにヨーロッパで記録された迷鳥 — オオヨシゴイ, アカガシラサギ, アメリカホシハジロ *Aythya americana*, メダイチドリ, シベリアヒバリシギ *Calidris subminuta*, ハジロオオシギ *Catrophorus semipalmatus*, ズアオカモメ *Larus cirrocephallus*, クロワカモメ *L. delawarensis*, ハシボソキツツキ *Colaptes auratus*, コマミジロタヒバリ *Anthus godlewskii*, シロハラコツグミ *Catharus ustulatus*, ホオアカアメリカムシクイ *Dendroica tigrina*, ジアメリカムシクイ *Seiurus aurocapillus*, ホオジロ, シベリアジュリン, ルリイカル *Guiraca (または Passerina) caerulea*。

(竹下信雄)

◎ 日本鳥学会近畿地区懇談会の近況 ◎

近畿地方に在住する鳥学会々員が気楽に話し合える会を昭和53年1月に発足させて2年目が過ぎました。2年目の例会の様子をお知らせいたします。

第5回例会及び総会。昭和54年3月18日、伊丹市労働福祉会館。台湾産チメドリ（標本供覧）／小林桂助、小笠原の鳥／坂根隆治、鳥声録音のしかた／伊東輝夫。

第6回例会。昭和54年9月9日、大阪市立自然史博物館。クマタカの生態／西垣外正行・小海途銀次郎・奥野一男・和田貞次、イヌワシの生態／山崎亨。

第7回例会。昭和54年12月9日、京都大学理学部動物学教室。鳥の種と亜種／坂根千、オオヨシキリの繁殖ステージと雄の行動／江崎保男。

第8回例会及び総会。昭和55年3月20日、伊丹市労働福祉会館。ヒヨドリの生態／平松山治、ホオジロの翼長の地理的変異／山岸哲。

尚この他、毎回若干名の短報発表者がありました。

この会の趣旨及び規約は「鳥学会ニュース」の1979年3月20日付№6にも載せていただきましたので繰り返しません。現在60名程の会員がおられます。鳥学会の会員を主な構成員にしてはいますが、会員外の方でも年会費（500円）を収められて参加されておられる方がいますので、即鳥学会の支部とは、今の所、いえない集りです。1年目には近畿地区の全ての鳥学会会員に例会の案内を送付いたしておりましたが、2年目からは、郵便代の節約のため、年会費を収めていただいた近畿地区懇談会会員だけに例会案内を発送してまいりました。

したがって、鳥学会ニュース、№6配布以降に鳥学会に入会された近畿地方在住の方で、当懇談会の存在を知らない方もあろうかと思われまふ。当懇談会に参加を希望される近畿地区在住の鳥学会員の方は事務局まで年会費をそえてお知らせ下さい。また詳細を知りたい方も事務局へ御一報下さい。尚事務局は昭和55年から、〒664 兵庫県伊丹市桜ヶ丘5-2-6、坂根千様方になりました。（文責 山岸 哲）

◎ 絶滅に瀕している佐渡の朱鷺について放言 ◎

現在佐渡に棲息している国際鳥類保護鳥日本特別天然記念物朱鷺は「ニッポンア・ニッポン」の学名をもつ世界的珍鳥・貴鳥の一つであることは今更申すまでもありませんが、その野生羽数が急速に激減し、僅か5羽になり、絶滅寸前、いやすでに絶滅だといわれている。これを増殖することは神業であるとさえ絶望的だとも申されています。

処で、この朱鷺の存亡をめぐり、増殖の考え方につき、期待されている方法に二つがあり、対立の論争をこれまで相当永年繰り返され結着の論議をつくさないまま地元の朱鷺の棲息状況を充分検討しないで中央の学者及びそれらの学者をとりまく団体が一方的に、しかも強行しようとしている。全鳥捕獲人工増殖保護策が、遂に講ぜられることとなり、着々事前準備工作が押し進められていることは、こと「トキ」に関心のある日本全国いや世界各国の方々の注目している処、この将来を見守りながらその成功を祈っているものである。

この絶滅寸前の機会に識者から見れば愚論愚策の最もなるものとは私も考えながら、敢えて申し述べたいと存じます。

先づ基本的論点ですが、全鳥捕獲人工飼育ということは、既に特別記念物ではないということだ。野生にあってこそ天然ということなのだ。依って鳥獣法その他関係法規を絶滅寸前という名目のもと、国家の名に於て破るものに等しい行為だ。人工増殖すること既に天然記念物ではな

く、絶滅同様のことである。万一その方法で繁殖可能であると専門的の技術からみて肯定され、如何に大型の拡張された「ケージ」に入ることそのことが野生ではないのだ。依って、地元において永年自然の生態の「トキ」の研究をつづけてこられた佐藤春雄氏の主張される自然繁殖策を意欲的に可能条件の環境整備のために経費を吝しまないことだ。

極論すれば、「トキ」が最後に安住の地として棲息した処が佐渡であるから、貴重なる「トキ」のため、佐渡全島とは申さないが、小佐渡を「トキ」に全面的に提供すべきだ。永久とは申さないが、自然繁殖に可能な羽数に増殖するまでの年月を本気で考慮すること、しかもその付近には飛行機は勿論自転車の立入りを禁止すること、当然観光バスも含むこと。更に徹底的に監視人以外は人間の出入りも禁止すること。その地域の田は幸か不幸か減反調整の対照として国が、県がこれを耕作者のため保証すること。原野草地とすること。一方、食餌の魚貝類は他から移入して給すること。又、カラスの如き「トキ」の害敵はそれぞれの方法で強力駆除することは当然である。

要は「トキ」が所謂安心して棲息出来る立地条件を国家が本気で講ずることであると考え。国が財政とか行政とかの理由を以て、「トキ」の環境条件を設置することが可能であれば、如何に国際的に日本に於ける特殊の珍鳥であれ、貴鳥であれ、滅亡するものは遂には滅び行く宿命にあるものと断ぜざらう得ない。

捕獲飼育したとしても飼育鳥でないからやはり環境が不純であれば成功は覚束ない。騒音、排気ガス、人間の出入りなどあれば、理論的には増殖する筈としても生物しかも自然の鳥としての安心感が得られなければ決して成功しないものであると考えます。御批判を乞う。

(1980年9月18日投稿 伊藤 貞)

◎ 鳥害研究室の発足にあたって ◎

昭和55年10月1日付で、農林水産省農事試験場畑作研究センター（筑波）に、鳥害研究室が設置された。日本名では鳥害研究室であるが、英名はOrnithological Laboratoryとした。“鳥害”をうまく表現しつつ研究室名としても適当な英語を私は知らない。小学館ランダムハウス英和大辞典でpestをひくと、insect pests害虫、とある。Insect Pest Laboratory（虫害研究室）という名の研究室が農林水産省にあるが、昆虫の研究者の中にはこの英名はおかしいという人もいる。この例にならえば害鳥はbird pestsとなるのだろうか、どうも耳なれない言葉である。それに“鳥害研究室”を標榜するからには、害鳥を研究するだけでは具合が悪い。その点、“農事試験場畑作研究センターで鳥類学を研究します”としておけば、畑作物と鳥類との種々雑多な関係を研究するということになる。しかも、畑作物と鳥類との関係は、前者が害を受ける側、後者が害を加える側という限られた面での多様な関係であることが多いようだ。キツキをみていた木もれ日のさす森林から、かんかん照りの畑に足を踏み入れてすぐにそのことを強く感じた。畑は農薬づけで、鳥が、農作物を加害する昆虫を食べる時間的余裕はないようにみえる。この点は、森林にいて畑を想像していたことと大きく異なっていた。現在の日本の農業と関連して鳥類学の研究を行う場合には、こういった点でかなり一方に偏った研究にならざるを得ないような気がしている。現状でベストな英名としてOrnithological Laboratoryとしたが、この名をお気にめさない方々もいるので、今後変更の可能性もあることを記しておく。

鳥害研究室設置の背景は次のように説明されている。鳥類による農作物の被害調査（農林省、1975）によれば、国内の栽培延面積約542万haの3.9%（約21万ha）が鳥害を受けており、被害金額は約72億円である。また、稲作、野菜、豆類、麦等様々な農作物が害を受けているという。こ

うした被害に加えて、最近では水田利用再編対策に伴って栽培面積の増加した作物に鳥害が目立ってきている。こうして、「以前から農作物に対する鳥類の専門研究組織の設置が要請されていたが、とくに近年は関係各方面から早急な研究対応を求める声が多い。しかし、国内においては、畑作物に対する鳥害専門研究室はいまだ設置されていないのが実情である」ので設置したということになっている。こうした背景をあげてはいるが、前記調査（農林省、1975）によれば、鳥害の中ではスズメによる稲の被害が面積、金額共に最大のものであること、それにもかかわらず鳥害研究室が畑作研究センターに設置され、しかも当面は転換畑におけるダイズのハト害を扱うことになっている点から考えて、水田利用再編対策に関してこの研究室が設置されたのは明らかであろう。では何故水田利用再編対策と関連させて鳥害研究室を発足させたのか、あるいは発足させざるを得なかったのか。この点の政治的背景や意味付けは明らかにされていないので、現在みられる農業に関する制度のゆきづまりや今までの農林行政のすすめ方から、想像していただく他ない。

鳥害研究室は鳥害専門機関として日本ではじめてのものであるらしい。現在農林水産省林業試験場保護部に設置されている鳥獣関係研究室は、森林保護の面からみた鳥類の役割の研究を行っており、森林保護のための鳥類保護といった研究が主要なものであるようだ。都道府県の林業試験場、農業試験場をみても鳥害を専門に扱っている研究室はやはりない。研究室要求の背景説明のとおり、鳥害研究室は日本ではじめてのものであると同時に、現在のところ唯一のものであるらしい。鳥害研究室では、畑作物の鳥害を扱うことになってはいるが、鳥害は様々な農作物に現われており、このような畑作物以外の鳥害に関する問合せや研究依頼も相当あるのではないかといささか心配している。鳥害研究室はわずか2人のスタッフによってスタートしたばかりであり、今は鳥害の1側面にしか研究を集中せざるを得ない時期である。また、そのような体制しかととのえることはできないように思える。わずか2人と言ったのは、例えば農林水産省で昆虫関係の研究者は、蚕糸試験場（約200名）、林業・茶業・果樹の各試験場（約40名）を除いても、農業技術研究所、農事試験場、各地域農業試験場等で約50名であり、哺乳類研究者も畜産・家畜衛生試験場を除いても、林業試験場で10名以上であり、鳥の研究者の数との差は大きい。昆虫による農作物の被害はたしかに鳥より大きいと思われる。しかし、2人のスタッフで畑作物加害鳥類の基礎的生態学の研究から、防除技術の開発研究まで手がけなさいというのは、どのようなものであろうか。だが、鳥害研究を農林水産省ではやっていますということだけを誰かに示すのなら、これでも十分というべきだろう。

現在の定員2人は、最高で3人になる可能性がある。言いかえれば、鳥害関係研究室が増えなければ、うまくいっても3人ということになる。当初の要求は定員3人であり、今後も2人研究室の解消をめざして定員増を要求していくらしい。しかし、現実には、農業関係問題の多様化、専門化、細分化による研究室数の増加と、総定員の頭打ちのため、1研究室当りの定員は減ることはあっても、増える見込みはあまりないといえよう。鳥類研究者の働く場所を確保するという意味では、定員増と同様、研究室の新設を要求する必要がある。

しかし、鳥類研究者のポストがあっても、それを鳥類研究者で埋めることができなければ、研究のすばやい進展もあまり望めず、また日本の鳥学界の人材の少なさを露呈するにすぎないのではないか。鳥害研究室のわずか2人のポストの1つであり、研究室の長である室長ポストに、今まで昆虫を材料としていた研究者でなく、何故鳥類の研究者を送り込むことができなかったのか。鳥類の研究者で適任者がみつからず、今回のような人事になったと聞いている。私は、鳥害研究室長になったN氏個人についてどうこういうつもりはまったくない。むしろ、氏が鳥害研究室長

を腰かけポストと考えず、今後昆虫研究者としての経験を生かして鳥類の研究を続けて行くのなら、これは大変結構なことと言わなければならない。日本における鳥類研究者のポストは非常に少ない、むしろ他の動物群に比べて少なすぎる。それにもかかわらず、鳥害研究室長のポストを埋める研究者がいなかったのである。このような状況は、日本の鳥学界をリードしてきた方々によって、一部もたらされたものと考えられる。今まで、鳥学研究者のポストづくりを考える必要のなかったのが、日本の鳥学界の特徴の1つではないだろうか。それは日本における鳥学開祖の方々のステータスをみれば、容易に想像できることである。ポストなくして、人材の養成、確保、交流は進展するはずがない。今回の人事にそのことが如実にあらわれている。そして、ポストの少ないことが、今までもそうであったが、今後は特に若手研究者の輩出を拒む大きな原因となるのではないか。これが一番大きな問題である。現在鳥類研究者のポストづくりの仕事は非常に重要であり、必要なものである。こうした動きの中心として、日本鳥学界の中心的存在である日本鳥学会に大いに期待したい。

鳥害研究室の紹介がずいぶん横道にそれてしまった。鳥害研究室の今後の方向等これからつめるべき点もあるが、様々な面で今後共日本鳥学会の皆様にはお世話になると思いますので、よろしく御指導のほどお願いいたします。

(1980年10月6日投稿 松岡 茂)

◎ お 知 ら せ ◎

◇維持会員募集 学会を財政的に支援する目的で、会則にもある維持会員を募集します。会費は1口1万円とし、何口でも可能ですので、ふるって申し込み下さい。なお、申し込み用紙は別紙のとおりです。

◇幹事の一部変更 千葉市動物園創設に多忙を極めていた会計幹事の宗近功氏は、しばらく幹事を離れることになりました。庶務幹事の大塚豊氏、会合幹事の田中康久氏も辞任されました。新幹事としては、会計幹事に上野動物園飼育係の福田道雄氏、庶務幹事(発送など)に米田実氏を迎えました。米田氏は、9月に会員諸氏にお送りした「例会案内」のハガキの「庶務幹事募集」を見て応募して下さいました。

新幹事は次のとおりです。

庶務幹事 唐沢孝一、米田 実
会計幹事 川内 博、福田道雄
編集幹事 森岡弘之、樋口広芳、竹下信雄

◇各種小委員会の新設 昭和55年3月29日神宮区民会館で開かれた評議員会で、学会のあり方について次の小委員会を設置して、各評議員で検討していくことになった。(＊印は委員会の責任者)

1. 大会のあり方(＊中村司、樋口広芳、山岸哲、小林桂助)
2. 受賞者選考(＊中村登流、浦本昌紀、唐沢孝一)
3. 会 費(＊吉井正、川内博、宗近功、長谷川博)
4. 会 則(＊森岡弘之、柴田敏隆、竹下信雄、唐沢孝一)

いずれも重要な問題ですので、会員の方からも積極的に御意見をお寄せください。

◇鳥に投稿を 本学会の会員であれば、鳥に投稿することができます。論文あるいは短報を随時お送り下さい。また、学会のあり方などについてのご意見は、「学会＝ニュース」で扱いますので、これも揮ってお寄せ下さい。いずれも、締め切り日は、とくに定めておりません。なお、学会＝ニュースへの投稿は、できるだけ簡潔にまとめて下さるようお願いいたします。

〔あて先〕

鳥原稿：113 文京区弥生1-1-1 東京大学農学部森林動物学教室 樋口広芳

学会ニュース：本学会事務所

◇鳥の制限ページ 鳥の投稿は、従来は制限ページを設けていませんでしたが、限られた会の財政の中で、できるだけ多くの論文等を載せたいという考えから、印刷ページ20ページまでに制限し、それ以上のページに及ぶ場合は、オーバーした分の実費を著者に負担していただくことになりました。印刷した場合、400字詰め原稿用紙5枚が1ページに入りますので、見当をつけて下さい。また、印刷代は1ページにつき約8,000円かかります。

◇昭和56年度大会 来年の大会は、6月6日(土)7日(日)の両日、茨城県にある農林省林業試験場で開かれることに決まりました。詳細は追ってお知らせしますが、大会出席のスケジュール、研究発表の準備など、今からお考え下さい。(唐沢、竹下)

◎ 本会関係の出版物 ◎

Bird of the Island of Java Vol. 1: Passeres 黒田長禮著、1933年、自費出版、英文、ヨコ27×タテ38cm、本文342頁、地図(折込)1頁、カラー版14枚。 頒価25,000円(会員割引20,000円)送料不要。残部26冊。本書は、故黒田長禮博士の労作のひとつで、全2巻からなる。残念ながら第1巻スズメ目しか残部がない。東洋区の南端であるという特別な認識のもとに、1929年の現地訪問以降進められた標本収集と研究が実ったものである。カラー図版では129羽の鳥が扱われており、1枚は当時14歳の黒田長久氏によるもの。他の13枚は、著名な小林重三^{しげかず}氏が筆をとっている。保存の程度は極めて良好である。非スズメ目合わせて全2巻揃うと、古本で10万円を越すと思われる。

日本鳥類目録改定第5版 日本鳥学会編纂、学習研究社発行、1974年3月。英文、和文、補遺の3冊セット。A5版。8,000円。

英文：364頁。日本産鳥類の全種について、近年世界的に採用されるようになったWetmore式による分類順に従い配列し、①学名②和名③英名を記し、世界における種の分布、日本における生息状況を述べ、さらに国内に生息する亜種ごとに、学名、世界における分布、国内の生息状況を述べている。

日本鳥類目録第1版 日本鳥学会編纂、発行、1922年11月。英文、A5版、本文184頁、索引18頁、2,000円。残部僅少。

日本鳥学会10周年(大正11年)を記念して出版された歴史的な文献。樺太、千島、台湾、朝鮮を含む日本産の鳥類全種について、亜種ごとに①学名②和名③英名を記し、国内における生息状況を述べている。

南千島の鳥類 V.A. ネチャエフ著、藤巻裕蔵訳、日本鳥学会発行、1979年6月、和文、A5版、本文200頁(環境写真16点を含む)、1,900円。

内容-①南千島の地理的概略②南千島の鳥類研究史③南千島の鳥類各論④南千島の鳥類地理学的概要⑤文献リスト⑥南千島産鳥類目録。

本書は、ソ連ナウカ社から出版された同国の鳥学者ネチャエフ博士のロシア語文献を和訳したものである。同博士は14か月にわたって、クナシリ島、色丹・歯舞諸島での鳥類の調査・採集を行ない、多くの貴重なデータを得て、従来の文献の記述の適否についても綿密な検討を加えた上で本書を著した。記録された鳥は236種に及び、同地域における分布状況を知り得るばかりでなく、その生態、計測結果、胃内容物による食性調査などの豊富なデータは非常に有用であり、たとえ

北方の鳥類に関心の少ない方でも、得るところは多大である。

世界のオウムとインコ 黒田長禮著、日本鳥学会発行、1967年6月発行、和文、A5版、本文849頁、カラー図版3頁（本文中写真等図版100点あり）、5,000円。

本書は、世界中のオウム・インコ類全324種（亜種も含めて826）について、①和名 ②学名 ③英名・独名・仏名（一部不明あり）を明記し、その形態、色彩、計測値、産地、習性、飼養について述べている。また、各属ごとに検索表があり、種の同定にも極めて有用である。

ミズナギドリ類の系統 黒田長久博士学位論文、1954年自費出版、英文、B5版、179頁、2,500円。

ミズナギドリ類の採食方法、筋肉、骨、気のう等の種ごとの相違について相互に系統分類学的考察を加えた労作。現在も、しばしば外国論文に引用される。正式なタイトルは、On the classification and phylogeny of the order tubinares, particularly the shearwaters (puffinus), with special consideration on their osteology and habit differentiation. (竹下信雄)

~~~~~

<あとがき> ▼1年ぶりの鳥学ニュースの刊行いかがでしょうか。学会誌では表わせない分野をこのニュースでカバーし、会員相互の情報交換や鳥学論議の場として御利用下さい。多くの方からの投稿お願いします。▼個体数が少く、春がきても囀らず、たとえ番形成しても卵はすべて無精卵、といえは佐渡のトキか、レーチェル・カーソンの「沈黙の春」かと思われる方も多いでしょう。ところが、“鳥でも自然でもない、鳥研究者自身のことだ”とH氏は指摘しています。集団内で野鳥愛好者の遺伝子頻度を高めることが、日本の将来のためにも急務では……。 (バカバカしい、そんな個人の勝手でしょ!!なんて思っている人はだれですか) ▼広大な十勝平野の下ま中で、エゾジカのバーベキューを味わいながらの鳥談義、楽しくかつ有意義でした。今年度の帯広畜産大での大会では、羽賀・藤巻両先生はじめ、多くの関係者の方々に大変お世話様になりました。厚くお礼申し上げます。来年の大会は6月上旬茨城県筑波研究学園都市で行われる予定です。イノシシになるか、ノウサギか、それとも筑波のガマガエルか、参加者のみのお楽しみ。(百舌)

会費：年額3,000円（入会金2,000円）。

入会のお申し込みは

会計幹事の川内博（〒167 東京都杉並区善福寺3-5-10）まで。

会計年度は4月から翌年3月までです。